

スポーツニュースにおける格助詞「と」の使用について

轟 里 香

A Study of Japanese “To” in Sports News

Rika Todoroki

スポーツニュースにおける格助詞「と」の 使用について

轟 里香*

A Study of Japanese “To” in Sports News

Rika Todoroki*

Received December 3, 2012

Abstract

The purpose of this paper is to analyze the Japanese complementizer “to” used in TV news programs, especially in sports news. Generally speaking, “to” is used with verbs like “iu” (*say*) or “omou” (*think*) to mark subordinate clauses. However, in TV news programs, “to” is often used in a different way these days. This paper tries to relate the special use of “to” to the analysis of Japanese resultative constructions by Todoroki (2002, 2004).

1. 導入

本論文は、近年、スポーツニュース¹⁾に生じている言語現象として、格助詞「と」を含む例を考察する。

轟 (2007, 2008, 2009)は、近年のニュース番組²⁾で用いられる言語において特徴的な様々な現象を、例を挙げて指摘した。これらに加え、轟 (2010) は異なるニュース番組間の比較を通して、番組の相違が言語に与える影響について考察した。さらに、轟 (2011) は、ニュース番組の中で使われる言語に、番組の部分によって特徴があるかどうかを考察したが、その中で、特にスポーツに関連したニュースで近年生じている言語現象として、格助詞「と」の特殊な使用を含む例を取り上げている。

以上のようにこれまでに明らかにしたことに基づき、本論文では、近年スポーツニュースに生じている格助詞「と」を含む例を考察し、このような言語現象が生じる要因を分析する。そして、この現象を、轟 (2002, 2004) における結果構文の分析と関連付けることを試みる。

本論文の構成としては、まず2節で、轟 (2011) の議論を踏まえ、近年ニュース番組において顕著に見られる言語現象として、スポーツに関連したニュースに生じている格助詞「と」の特殊な使用を指摘する。3節では、轟 (2002, 2004) における結果構文の分析を見る。4節では、スポーツニュースに生じている格助詞「と」の使用に働くメカニズムが、日本語の論理的結果構文に働くものと類似していることを指摘する。5節では、本論文の議論のまとめを行う。

*教育能力開発センター
Center of Development for Education

2. スポーツニュースにおける「と」の使用

現在スポーツニュースでは、次の(1)のような、格助詞「と」の特殊な使い方が多く見られる。(以下、例文中で指摘したい部分に下線を付してある。)

- (1) 試合前、真の男はいないものかと話した原監督。その嘆きに選手が答えます。4回、1塁2塁で大村。移籍後2試合目の先発です。結果を出さないといけない立場とタイムリー。巨人、この三連戦で始めて先制します。

(「ニュースウォッチ9」NHK、2011年7月7日放送)

(1)の「結果を出さないといけない立場とタイムリー。」という部分で、格助詞「と」が特殊な使い方をされている。

一般的には、格助詞「と」には引用を表す用法があり、文あるいは文相当の語句や擬声語を承け、続く動詞(「思う」「言う」「聞く」などの場合が多い)の内容を表す(小学館『国語大辞典』第二版、「と」の項)。例えば、次のような場合である。

- (2) a. 大事な試合にもかかわらず皆調子が悪く、太郎は、自分ががんばらなければと思った。
b. 試合前、真の男はいないものかとと話した原監督。

(2b)は(1)の第一文であるが、この部分の「と」の用法は、「話した」という動詞を伴っていることからわかるように、引用を表す用法である。一方、(1)の第五文の「結果を出さないといけない立場とタイムリー。」という部分の「と」の後には、「思う」「言う」「聞く」などの動詞がない。

この(1)の第五文は、次の(3)の括弧中の表現を省略したものに見えるかもしれない。

- (3) (大村は) 結果を出さないといけない立場と (思って) タイムリー (を打ちました)。

括弧中の表現を補えば、(3)は文法的には成立している文となる。(他の人にはわからない人物の内面を描いていることになるが、このようにいわば人間を超越した視点から述べることはスポーツニュースではしばしば見られる。)

しかし、「と」を使用した例には、上のような説明では扱えないものがある。次の(4)を見よう。

- (4) …その裏2アウト満塁で天谷。大竹を楽にさせるために打ちたかったとタイムリーヒット。この回さらに2点を加えた広島。連敗は3でストップです。(広島対中日)

(※注 天谷、大竹は広島の選手で、大竹は投手。)

(「ニュースウォッチ9」NHK、2009年9月16日放送)

この例は、次の(5)の括弧中の表現が省略されたものとはみなせない。

- (5) * (天谷は) 大竹を楽にさせるために打ちたかったと (思って) タイムリーヒット (を打ちました)。

(5)を、次の文と比べてみよう。

- (6) a. 花子は、受賞パーティーに着て行きたいと思ってその青い服を買った。そしてそれを着て受賞パーティーに行った。
- b. *花子は、受賞パーティーに着て行きたかったと思って、その青い服を買った。そしてそれを着て受賞パーティーに行った。

(6)で、花子が受賞パーティーに行くのは、その服を買った後である。よって、(6b)は、補文の時制が不適格である。同様に(5)も時制が合わないので不適格となる。つまり、(4)は(5)の括弧中の表現が省略されたものとみなすことはできない。³⁾

では(4)のような表現をどのように考えることができるのであろうか。本論文は、この現象を結果構文の分析と関連付けることを試みる。それに先立ち、次節では、轟 (2002, 2004) における結果構文の分析を概観する。

3. 結果構文の分析

結果構文は、これまで様々なアプローチによって研究されてきた構文である。そのような研究の一つとして、高見 (1997)による分析がある。高見は結果構文を語彙的結果構文と論理的結果構文に分類し、それぞれが英語と日本語で可能かどうかを論じている。轟 (2002, 2004)は、高見による結果構文の分析の問題点を指摘し、日本語の結果構文に対する制約を提案した。この結果構文に対する制約が、本論文の議論の基となる。

3.1. 結果構文

英語の場合、結果構文としてしばしば議論されるのは、(7)のような文である。

(7) Mary painted the wall green. (高見 1997:28)

(7)のような結果構文では、行為を表す他動詞があり、その後ろに目的語、および結果述語 ((7)の場合は green) が続くというのが一般的な形になる。結果述語 (resultative predicate) とは、行為の結果状態を示す表現である。

一方、日本語においては、(8)のような文が結果構文として扱われる。

(8) 花子は、その壁を赤く塗った。

日本語では、結果述語 ((8)の場合は「赤く」) が動詞の前に置かれる形をとる。

高見 (1997) によれば、結果構文は、語彙的結果構文と論理的結果構文とに分けられる。語彙的結果構文とは、結果状態を示す表現 (すなわち、結果述語) の表す意味を動詞が内在的にもっている結果構文であり、上で挙げた例文(7)(8)や、以下の(9)(10)のような例文がそれにあたる。

(9) The boy broke the vase to pieces. (ibid., 28)

(10) 太郎は皿を粉々に割った。 (ibid., 31)

(9)の例文で、動詞 **break** は、結果述語 **to pieces** が示す状態を意味の一部としてもっている。Jackendoff (1990) らの考え方にしたがって動詞 **break** の意味を分解すると、結果述語 **to pieces** は **break** の意味の中にすでに指定されている。

(11) break: []_x CAUSE [[]_y BECOME [[]_y BE AT-[SMALL PIECES]]

(ibid.,30)

同様に、日本語の例文(10)に関しても、動詞「割る」は結果述語「粉々に」を意味の一部としてもっている。

(12) 割る：壊して粉々にする (小学館『学習国語新辞典』、ibid.,32)

このように、これらの例文においては、「動作が目的語の変化を引き起こし、その結果、目的語がある状態になる」ということを動詞が意味の一部として含んでおり、結果述語は、それぞれの動詞が意味の一部としてもっているものを具体的に示したものとなる。このような結果構文を語彙的結果構文と呼ぶ。例文(7)から(10)が示すように、語彙的結果構文は英語・日本語の両方において適格となる。

一方、論理的結果構文は、語彙的結果構文とは異なり、動詞自体が結果述語の示す状態を意味の一部として含んでいるわけではなく、行為と結果が論理的因果関係で結び付いている。したがって、論理的結果構文においては、結果状態は社会的常識に基づいて容易に想像できるものとなっている。高見は、適格な論理的結果構文および不適格な論理的結果構文として、次の(13)から(16)のような例を挙げている。

(13) The gardener watered the tulips flat. (ibid., 28)

(14) *庭師は、チューリップにぺちゃんこに水をかけた。 (ibid., 28)

(15) John boiled the lobster red. (ibid., 33)

(16) ??太郎はロブスターを赤くゆでた。 (ibid., 35)

例文(13)では、**water** という動詞は水をかけるという行為のみを表し、その結果どうなるかまでを動詞の意味の一部としてもっていない。それで(13)は語彙的結果構文ではない。この場合、チューリップに水をかけ続けるとチューリップがぺちゃんこになる、という社会的常識に基づいて、行為と結果が論理的因果関係で結び付けられる。したがって、(13)は論理的結果構文となる。同様に(14)から(16)の文も、行為と結果が論理的因果関係で結び付けられており、論理

的结果構文である。高見 (1997) は、これらの結果構文のうち、英語の結果構文のみ適格で、日本語の結果構文は不適格であるとし、論理的結果構文は日本語においては不適格になると結論している。

上に述べた日本語の論理的結果構文に関する議論に関し、轟 (2002) は次のような問題点を指摘している。(16)の例文は、結果述語を(17b)のように変えると、適格性が上がる。

(17) a. ??太郎はロブスターを赤くゆでた。(=(16))

b. 太郎はロブスターを真っ赤にゆでた。

(17a)の結果述語「赤く」を「真っ赤に」に変えた(17b)は、多くの日本語母語話者によって適格と判断される。それで、(17a)の適格性が低いのは、論理的結果構文であるからではなく、別の要因によると考えられる。⁴⁾

さらに、次のような例もある。

(18) 豆をくたくたに煮る。

(轟 2002:217)

(18)において動詞「煮る」は結果述語が示す状態を意味の一部として含んでいない。よって、(18)は語彙的结果構文ではなく論理的結果構文である。それにもかかわらず、(18)は多くの日本語話者によって適格だと判断される。

このように、日本語でも論理的結果構文は全く不可能なわけではない。以下では、轟 (2002) が提案する、日本語の結果構文に対して存在する制約について述べる。

3.2 日本語の結果構文に対する制約

日本語の論理的結果構文のうち、明らかに不適格な(14)と、多くの日本語話者が適格と判断する(17b)および(18)を比較すると、次のような相違があることがわかる。不適格な(14)においては、結果状態は主語の指示物の意図したものではない。これに対し、例文(17b)(18)では、主語の指示物が結果状態（ロブスターが真っ赤になること、豆がくたくたになること）を意図していると考えられる。⁵⁾

以上のことから、日本語の結果構文の場合、主語の指示物が結果状態を意図しているかどうか、結果構文の適格性に大きな影響を及ぼすことになる。轟 (2002) は、日本語の論理的結果構文に対し、次のような制約を提案した。

(19) 日本語の論理的結果構文に対する制約

日本語の論理的結果構文では、結果述語で表される結果状態が、主語の指示物によって意図されたものでなければならない。

(19)の制約により、上に挙げた例文の適格性は以下のように説明できる。

(20) The gardener watered the tulips flat. (=13)

(21) a. *庭師は、チューリップにぺちゃんこに水をかけた。(=14)

b. ?太郎は床につるつるにワックスをかけた。

英語の論理的結果構文(20)が適格なのに対し日本語の(21a)が不適格なのは、日本語の論理的結果構文には(19)の制約が存在するためであると考えられる。チューリップをぺちゃんこにすることを庭師が意図して水をかけるということは普通ないため、(21a)は(19)の制約を破ることになる。結果状態を主語の指示物が意図していたというコンテキストでは、(21a)のタイプの文も適格性が上がる。(21b)はこのようなコンテキストがあるため、(21a)よりも適格性が上がるのだと考えられる。⁶⁾ (22)(23)も見てみよう。

(22) John boiled the lobster red. (=15)

(23) 太郎はロブスターを真っ赤にゆでた。 (=17b)

(23)の「真っ赤に」で表される結果状態は、主語の指示物によって意図されたものとみなされ得るので、(23)は(19)の制約にかない、適格になると考えられる。

このように、日本語の論理的結果構文に対する(19)の制約の存在を仮定することにより、様々な文の適格性を説明できる。

ここまでで、日本語の論理的結果構文に対する制約として轟(2002)が提案した(19)を説明した。

次に、日本語の論理的結果構文に(19)のような制約がある理由を見てみよう。轟(2004)は次のように説明する。一般に、言語表現における線的順序は現実の時間的順序を反映する(iconicity)。行為と結果に関してみると、現実の時間的順序では、行為があつてその後結果が続く。結果を引き起こす行為が時間的に結果の後になるということはありません。言語表現においても、現実の時間的順序を反映して、「行為-結果」の語順になるのが自然であり、「結果-行為」の語順は不自然になると考えられる。

このことを踏まえて、英語の結果構文が表す行為と結果を見ると、次のようになる。

(24) a. The gardener watered the tulips flat. (=13)

行為 結果

b. John boiled the lobster red. (=15)

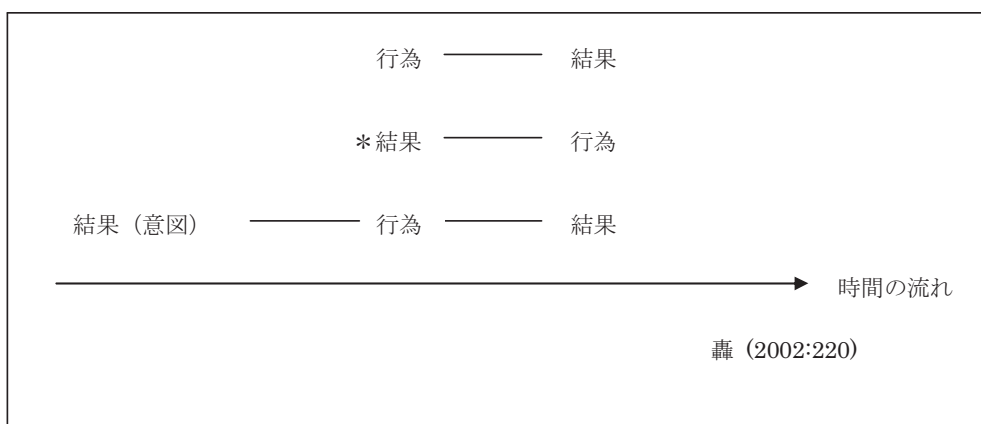
行為 結果

影山(1996)が述べるように、英語はSVO言語であり、文は動詞で終わらないので、動詞の

後ろに比較的自由に結果述語を付けることができる。したがって、英語では、平叙文の結果構文は現実の時間的順序を反映した「行為－結果」の語順となる。

一方、SOV 言語である日本語は動詞で文が終わるので、結果述語を動詞の後ろに続けることができない。そこで、動詞の前に結果述語を付けることになるので、「結果－行為」の語順になり、現実が生じる時間的順序とは反対になる。このままでは、これは不自然となる。しかし、動作主がはじめから結果状態を意図している場合、結果状態はいわば行為に先立って動作主の認識の中に存在しているとみなすことができる。よってこの場合、「結果－行為」の語順が許されると考えられる。このことは、図 1 のように表せる。

図 1



動作主が結果状態を意図していない場合には、「結果－行為」の語順は現実の時間的順序に合わず不自然となる。このように、日本語の論理的結果構文に対する制約(19)は iconicity から生じていると言える。行為・結果の順序関係が文の適格性に影響を及ぼすことは、次のような英語の例によっても支持される。

(25) a. ??/*How flat did the gardener water the tulips?

結果 行為

b. ??/*How red did you boil the lobster?

結果 行為

(高見 1997:34)

英語で適格な論理的結果構文を、疑問文にすることによって(25)のように「結果－行為」の語順にすると、英語でも論理的結果構文が不適格になる。⁷⁾

一方、語彙的結果構文においては、行為と結果を結びつけているのは論理的因果関係ではな

く、行為を表す動詞自体が結果述語の示す状態を意味の一部として含んでいることである。したがって、論理的結果構文ほど語順は重要ではなく、結果一行為の語順になる日本語においても、語彙的結果構文は比較的容易に作ることができると考えられる。これは、英語の次のような文に見られる現象と平行している。

(26) a. The gardener watered the tulips flat.
b. John boiled the lobster red.
(=(13)(15))

(27) a. ??/*How flat did the gardener water the tulips?
b. ??/*How red did you boil the lobster?
(=(25))

(28) a. John hammered the metal flat.
b. Mary wiped the table clean.
(ibid., 33)

(29) a. How flat did John hammer the metal?
b. How clean did Mary wipe the table?
(ibid., 34)

英語においても、(26)のような論理的結果構文は、(27)のように疑問文にして結果一行為の語順になると不適格になるのに対し、(28)のような語彙的結果構文の場合は、(29)のように疑問文にして結果一行為の語順になっても適格となる。したがって、語彙的結果構文では、iconicityが文の適格性に影響を及ぼすことはあまりないと言える。

このように、日本語においては、結果状態を表す結果述語が行為を表す動詞の前にくるため、特に論理的結果構文において制約が課せられることになる。

ここまでで、轟 (2002, 2004) における結果構文に関する議論を紹介した。次節では、2節で見たスポーツニュースの格助詞「と」を、結果構文の分析と関連付けることを試みる。

4. 格助詞「と」を使った構文と結果構文の比較

先に述べたように、格助詞「と」の一般的な用法は、引用を表す用法である。「と」は文あるいは文相当の語句や擬声語を承け、続く動詞（「思う」「言う」「聞く」など）の内容を表す。言うまでもなく、スポーツニュースにおいても、このような一般的な用法に従った「と」が出現することもある。次の例は、一般的な「と」の用法に従っているものである。

(30) (西岡選手は) アメリカにわたっておよそ5か月。去年までのスイングがはじめてできたと、手ごたえを口にしました。
(西岡選手)「結果が出てよかったなと思います。チームが勝てるように貢献していきたいなと思います。」 (「ニュースウォッチ9」NHK、2011年7月7日放送)

(30)で使われている「口にしました」は「言いました」とほぼ同義であり、したがって「去年までのスイングがはじめてできた」との「と」は一般的な用法の「と」である。(30)では、この「と」の使用に続き、西岡選手の試合後のインタビューの映像と発話の音声流されている。それで、「と」によって表されている「去年までのスイングがはじめてできた」は、西岡選手のインタビューでの発言内容の一部であると推測できる。

これを踏まえて、スポーツニュースにおいて特殊な「と」が出現する現象を考えてみよう。以下にもう一度例を挙げる。

(31) (=4) ……その裏 2 アウト満塁で天谷。大竹を楽にさせるために打ちたかったとタイムリーヒット。この回さらに 2 点を加えた広島。連敗は 3 でストップです。

ここで、(31)における「と」が(30)の例にある「と」と基本的に同じ機能を持ち、それをもとに(31)の表現が作られたと仮定する。そうすると、(31)の「大竹（投手）を楽にさせるために打ちたかった」は、試合後のインタビューでの天谷選手の発言内容の一部であることになる。このことは、次の例によっても支持される。(32)は他の試合に関するニュースに出現したものである。

(32) 打線がこたえたのは 7 回。チャンスで長野。内海さんががんばっていたのでとタイムリー。同点に追いつきます。(阪神対巨人)
(「ニュースウォッチ 9」NHK、2012 年 9 月 6 日放送)

(32)においては、「と」で標示されているのが選手の発話であることが、「内海さん」という表現から分かる。

同様に、(31)では、天谷選手が試合後のインタビューで、その試合のある場面を振り返って、あの時は同じチームの大竹投手を楽にさせるために打ちたかったという内容のことを述べたと考えられる。言うまでもなく、そのようなインタビューは、時間的には試合より後である。しかし、天谷選手が「大竹（投手）を楽にさせるために打ちたい」と思うのは、試合中、それもタイムリーヒットを打つ前である。ここで関係している事態は 3 つであり、それらを時間的順序に従って並べると、次のようになる。

(33) ①天谷選手は大竹投手を楽にさせるために打ちたかった。→②天谷選手はタイムリーヒットを打った。→③天谷選手は大竹投手を楽にさせるために打ちたかったと語った。

(33)において、①は（天谷選手の）意図、②は（天谷選手の）行為、③は行為後の事態と見なせる。

ここで、「と」を使ったこのような構文と、3 節で述べた結果構文とを比較してみよう。

(34) (=17b) 太郎はロブスターを真っ赤にゆでた。
(「真っ赤に」が結果述語で結果を表し、「ゆでる」が行為を表す)

(34)の論理的結果構文および(31)の「と」を含んだ文に含まれる事態を表にすると、それぞれ表 1、表 2 のようになる。

表 1

例文(34)

意図	行為	結果
動作主（太郎）がロブスターを真っ赤にすることを意図する	動作主（太郎）がロブスターをゆでる。	ロブスターが真っ赤になる

表 2

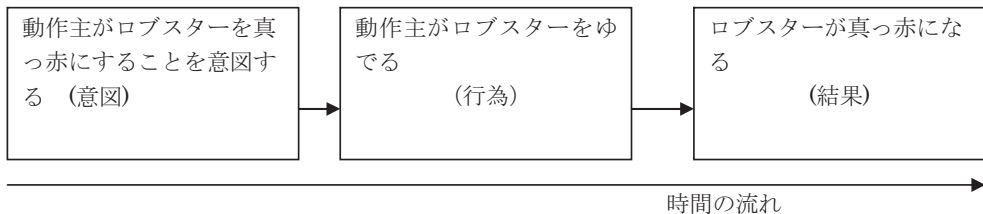
例文(31)

意図	行為	行為後の事態
動作主（天谷選手）が大竹投手を楽にさせるために打つことを意図する	動作主（天谷選手）が（タイムリーヒットを）打つ	動作主（天谷選手）が大竹投手を楽にさせるために打ちたかったと語る

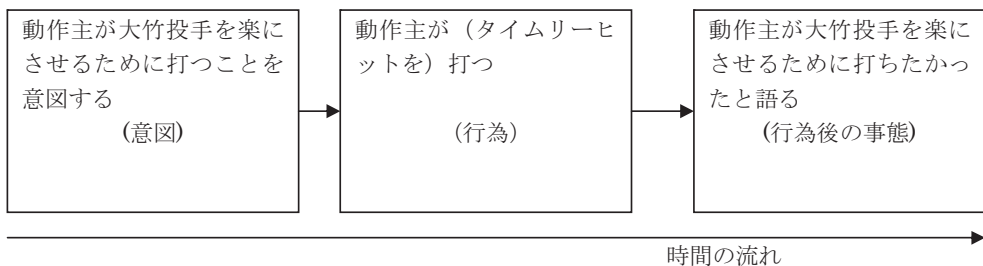
(34)および(31)で表される事態を時間的順序に従って表すと、図 2 のようになる。

図 2

例文(34)



例文(31)



3 節で述べたように、結果構文は行為と結果を凝縮した形で表す構文であり、その一種として論理的結果構文がある。論理的結果構文においては、行為と結果が論理的因果関係で結び付けられる。現実の時間的順序では、行為と結果は「行為－結果」の順番に生じるので、iconicity の点から見て、論理的結果構文においても本来「行為－結果」の語順になるのが自然である。

英語と異なり SOV 言語である日本語は、結果構文において動詞の前に結果述語を付けることになるので、「結果－行為」の語順になり、現実には生じる時間的順序とは反対になって、不自然となりやすい。しかし、動作主がはじめてから結果状態を意図している場合、結果状態はいわば行為に先立って動作主の認識の中に存在しているとみなすことができ、(34)のような論理的結果構文が可能となる。(34)においては、①動作主(太郎)がロブスターを真っ赤にすることを意図し、②動作主(太郎)がロブスターをゆで、③ロブスターが真っ赤になる、という3つを凝集した形で表している。

一方、(31)においては、現実の時間的順序では、「天谷選手がタイムリーヒットを打つこと」が「天谷選手が大竹投手を楽にさせるために打ちたかったと語る」より前である。よって、「大竹を楽にさせるために打ちたかったとタイムリーヒット。」という表現は、現実には生じる時間的順序とは反対になっている。しかし、この場合動作主はヒットを打つ前に「大竹投手を楽にさせるために打つこと」を意図しており、行為に先立ってこの意図が存在しているとみなすことができる。つまり、①動作主(天谷選手)が大竹投手を楽にさせるために打つことを意図し、②動作主(天谷選手)が(タイムリーヒットを)打ち、③動作主(天谷選手)が大竹投手を楽にさせるために打ちたかったと語る、という3つがあり、これらを凝集したものが「大竹を楽にさせるために打ちたかったとタイムリーヒット。」という表現となっていると考えられる。

次の例も同じように考えることができる。

(35) (=1)) ・ ・ ・ 4回、1塁2塁で大村。移籍後2試合目の先発です。結果を出さないといけない立場とタイムリー。 ・ ・ ・

(35)には、①動作主(大村選手)が(自らを)結果を出さないといけない立場とみなし、②動作主(大村選手)が(タイムリーヒットを)打ち、③動作主(大村選手)が結果を出さないといけない立場(だった)と語る、という3つが含まれており、これらを凝集したものが「結果を出さないといけない立場とタイムリー。」という表現となっていると考えられる。この場合、一見(31)とは異なるように見えるのは、①を「動作主の意図」と呼ぶのは難しいように思われることである。しかし、行為に先立つものをより広く「動作主の認識」と仮定すると、(35)を(31)と同様に考えることができる。(35)の場合は、(自らを)結果を出さないといけない立場とみなすことが、行為に先立って存在しているということになる。

このように、スポーツニュースにおける格助詞「と」の特殊な使用には、結果構文が作られる際と似た事態認識が働いている。共に、行為に先立って存在する動作主の認識(動作主の意図など)を利用して、行為と結果(または行為後の事態)を凝集して表現しているといえる。

スポーツニュースでこのような表現を使う目的は何かに関しては、いくつかの可能性が考えられる。一つは、表現を凝集させて短い時間で多くのことを述べることによって、スピード感のようなものを出すことである。また、このような「と」の用法は通常の用法とは異なるため、あえて通常とは違う使い方をすることによって生じる違和感を利用しているとも考えられる。このような違和感を効果として利用することは、文学的な作品ではしばしば見られるが、スポーツニュースにおける「と」の用法もそれに類似したものである可能性がある。⁸⁾

5. 結論

本論文では、いわゆるニュース番組の中のスポーツニュースにおいて顕著な言語現象について考察した。

一つのニュース番組の中でも、番組の部分によって、そこで使われる言語には特徴が見られ

る。特に、スポーツニュースは特有な言語現象を示すことが多い。その一つに、ここまで考察した格助詞「と」の特殊な使用がある。本論文では、この現象を結果構文の分析と関連付け得ることを示した。

註

- 1) 本論文での「スポーツニュース」とは、ニュース番組のスポーツを扱ったニュースの部分を目指す。
- 2) 本論文で扱うニュース番組は、NHKで放送されたものである。NHKの分類では、放送するプログラム全体を、「ニュース」とそれ以外のプログラムに二分し、「ニュース」以外のプログラムを「番組」としているようである。本論文では、「番組」という語を「テレビで放送されるプログラム」という一般的な意味で用いることとし、ニュースを扱っているプログラムを「ニュース番組」と呼ぶこととする。
- 3) このような「と」は、野球に関するニュースで目立つが、野球に限らずそれ以外のスポーツニュースでも現れる。(i)はフィギュアスケートに関するニュースである。
- (i) 小塚崇彦は最初に4回転ジャンプを予定していました。しかし、練習で飛べていなかったと3回転に変更。(「ニュース7」NHK、2011年11月12日午後7時放送)

また、このような「と」は、(NHKアーカイブストライアル研究で得たデータによると)NHKのニュースでは2007年ごろから出現し始めたようだが、この点に関してはさらに調査が必要である。

4) 轟(2004)は、(17)で結果述語を「赤く」から「真っ赤に」にすると適格性が上がる理由を次のように説明する。Napoli(1992), Goldberg(1995), 高見(1997)らが指摘するように、結果構文の結果述語は、一般に、極端な状態を表す表現でなければならない。このことを示す例として、次の(ii)のような文が挙げられる。

- (ii) a. She watered the tulips [{flat/*droopy}].
b. We heated the coffee [{hot/*tepid}].

(Napoli 1992:79)

結果述語として、flatやhotのようなスケール上の終点を表す表現は使えるが、droopyやtepidのような表現を結果述語に使うと、不適格になる。(17b)の「真っ赤にゆでる」は赤さにスケールを仮定しその中での終点を表すことになるので、「結果構文の結果述語は、一般に、極端な状態を表す表現でなければならない」という条件にかなう。一方、(17a)の場合、単に「赤く」と言うと、赤さにスケールを仮定せず他の色との対照が想定されることになる。例文(8)の「赤く塗る」(語彙的結果構文)の場合は、結果述語として「赤く」「青く」「黒く」などをとる可能性があって、その中の一つとして「赤く」がある。したがって「赤く塗る」と述べることに意味があることになる。しかし(17a)の「??赤くゆでる」の場合は、他の色になることがあり得ないので、わざわざ「赤く」と述べることに意味がなく、不適格になるのだと考えられる。

5) 主語の指示物が結果状態を意図しておらずたまたまそうなった、というコンテキストでは、(17b)(18)のような文も不適格になる。詳しい議論は、轟(2002)を参照されたい。

6) (21b)が完全に適格でないのは、「かけた」の直接目的語が「ワックス」であり、「床」ではなく、一方、「つるつる」は床の状態であるためと考えられる。(高見(1997)によれば、結果構文が表すのは、直接目的語の結果状態でなければならない。)

7) (25)に関しては、Kuno and Takami(1993)も参照。

8) 轟 (2011) はこのことを、ニュースを娯楽的に脚色するという傾向と関連づけ、スポーツニュースの娯楽性がニュース項目の中で特に高いことを言語的に示すものと指摘している。

参考文献

- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, Cambridge, MA: MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版。
- Kuno, Susumu, and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and Discourse Principles: Functional Syntax and GB Theory*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Napoli, Donna Jo (1992) "Secondary Resultative Predicates in Italian," *Journal of Linguistics* 28, 53-90.
- 高見健一 (1997) 『機能的統語論』くろしお出版。
- 轟 里香 (2002) 「日英語の結果構文の相違に関する一考察」 *Kansai Linguistic Society Proceedings* 22, 214-224.
- 轟 里香 (2004) 「英語および日本語における結果構文—Iconicity の観点から」『北陸大学紀要』第 28 号、247-255。
- 轟 里香 (2007) 「映像メディアで使用される言語の変化—英語学習者に対する影響—」『北陸大学紀要』第 31 号、125-135。
- 轟 里香 (2008) 「ニュース番組で用いられる言語の変化について」『北陸大学紀要』第 32 号、121-133。
- 轟 里香 (2009) 「日英語における強調表現」『北陸大学紀要』第 33 号、101-108。
- 轟 里香 (2010) 「ニュース番組の相違が言語に及ぼす影響」『北陸大学紀要』第 34 号、99-109。
- 轟 里香 (2011) 「ニュースの内容による言語的相違」『北陸大学紀要』第 35 号、1-12。

